

十日市の起源にせまる

法幢院の木造厨子入り地蔵菩薩坐像（市指文化財）



厨子と厨子内面に記された銘文
戦国時代の様子を今に伝える

十日市場の宝幢庵の公用なり
甲陽の城主
本尊地蔵菩薩坐像
檀門宅庭中の出俗男女、毎月費用を捧げ、斯の助成を以て造り奉り、殿内に入仏申すなり
材木の旦那は小池入道浄慶、同じく番匠刷（かいつくろい）は当庵檀那の河西淡路守、大工は加賀美五郎右衛門
本願主は当庵住持周紹蔵主なり
天文三年甲午八月彼岸の辰（とき）なり
筆者元明周、之を鑑（かん）がみる。

本尊地蔵の宮殿の事
檀門宅庭中の出俗男女、毎月費用を捧げ、斯の助成を以て造り奉り、殿内に入仏申すなり
材木の旦那は小池入道浄慶、同じく番匠刷（かいつくろい）は当庵檀那の河西淡路守、大工は加賀美五郎右衛門
本願主は当庵住持周紹蔵主なり
天文三年甲午八月彼岸の辰（とき）なり
筆者元明周、之を鑑（かん）がみる。

南アルプス市十日市場の県道に面したお寺、法幢（ほつどう）院の本尊「木造厨子入り地蔵菩薩坐像」は、読んで字のごとく、厨子（ずし）に納められたお地蔵さまです。厨子とは、仏像などが安置される両扉の入れ物を指しますが、この厨子は両扉がすでに失われてしまっています。

お地蔵様は、像高（座高）20cm程の小さな像ですが、非常にまとまりのよい作例です。その形や技法から、戦国時代（今から480年程前）に造られたものと思われる。またお地蔵様が納められた厨子ですが、戦国時代にさかのぼる単独の厨子は、山梨県内では珍しく、当時の建築様式を知る上でこちらも貴重な資料といえます。これに加え、厨子の内側三つの壁面には墨で銘文が書かれていて、現代の私たちにさまざまなお話を教えてくれます。

記された銘文には、天文3年（1534）に檀家の人々が毎月費用を出し合い、大工の加賀美五郎右衛門に依頼してこの厨子を造った経緯が記され、当時の人々の厨子建立に寄せる思いを今に伝えています。また、ここに「十日市場」の村名が見えますが、この銘文が十日市、または十日市場と記された現在確認されている最古の資料です。このことから甲府盆地に春を呼ぶ祭りとして有名な「十日市（市指定史跡）」の起源が、

少なくとも戦国時代よりも前にさかのぼることもわかるのです。天文3年は、甲斐国では武田信玄のお父さんの武田信虎の時代です。

なお、お地蔵さまの台座の底面には、天保8年（1837）にこの像が修復されたことが記され、その後も人々によって大切に守り伝えられてきたことがわかります。

戦国時代にさかのぼる作例で仏像、厨子がそろい、銘文が伴う例は県内では非常に稀なことです。そこで平成19年には、美術史、建築史、文献史学などさまざまな分野の専門家による総合的な調査が行われました。これを受けてこのお地蔵様と厨子は平成20年、市の指定文化財となっています。

※今回紹介した地蔵菩薩坐像は信仰の対象であり、一般にひろく公開されているものではありません。



法幢院の本尊 木造地蔵菩薩坐像



建築史の視点から、芝浦工業大学 渡辺研究室による厨子の調査



法幢院
例年お寺に面する県道で十日市が行なわれている



台座底面の銘文 造立から300年余りを経て、天保8年（1837）に、京都の仏師宗開によって地蔵菩薩坐像が修復されたことがわかる